

第91話 故緒方惟孝君略伝

薬学雑誌 1905年度(明治38年)4月号

「君は我国洋学の祖、緒方洪庵先生の第四子にして、弘化二年七月(1845年)浪華船場に生る」で始まる溝口恒輔氏の追悼文である。父に比べてあまり知られていないが、薬学会には大いに貢献した。惟孝は明治19年7月薬学会に入会、このころ会員は100人足らずだった。のち大阪薬剤師会会頭も務め、死の2年前、東京以外で初めて総会が開かれた大阪大会では準備委員になっている。

この記事によれば——史実は未確認だが——数え6歳で漢学を後藤松陰に学び、14歳の春筈を負ふて越前大野の伊藤慎造に蘭書を学んだ。15歳(1859年)転じて長崎に至り米人スミットから医学を研修す。そして1861年江戸下谷の西洋医学所(東大医学部の前身)教授に任ぜらる。1863年開成学校(これも東大の前身)英学教授心得を拝命、1865年ロシア留学。1868年帰国すると時代は明治。以後、新潟病院兼洋学校取締、北海道開拓使御用掛兼函館露学校教官(この時教材として作ったロシア語の辞書「魯語箋」が有名)、次いで大蔵省御用掛と転々としたのち、明治8年(1875年)病を得て職を辞す。

しばらく休養していたが明治11年薬舗開業免許を取得するや12年開業、続いて大学付属医院の薬局調剤員となる。

7年務めた明治20年、兄緒方惟準が大阪で病院設立するに当たり、薬剤部長兼事務長となり支えた。弟たちは若死にしたりして残った収二郎も13歳下、家長の惟準に頼りにされた。「君、人となり温良恭謙にして義気に富み、ために知人の信用厚く…」とある。父洪庵と同じく政治的には立ち回らず、自らの技能を求められるまま公に奉仕したように思える。

何にでもなれた彼が選んだ職業は普通の薬剤師だった。当時薬の品質はバラバラであったが、その管理、分析は医師にできなかった。患者のことを考えたら医師より薬剤師の方が重要だ、と惟孝は思ったのかもしれない。帝大医科大学教授の三宅、大沢、緒方(緒方家と関係なし)、高橋や北里も早くから薬学会会員だった。今、医薬品の品質は極めて良く、薬剤師の日常業務に実験技術も必要ない。薬が粗悪であった頃の方が薬学の地位が高かったというのは皮肉である。

「二月卒然肺膿瘍に罹られしが病勢進み」3月20日死去。享年62歳。子はなく、兄惟準の子に、銚次郎、病理の緒方知三郎、薬学の緒方章がいる。血清学の緒方富雄は銚次郎の子。

小林 力

